

わが国における経済学関係の個人全集について

杉 原 四 郎*

I

中野重治は『鷗外，その側面』の「漱石と鷗外との位置と役割」という文章の中でつぎのようにのべている。

「偉大な作家，えらい文学者という場合，そこには，その人の仕事の量ということが問題になる。もともと文学は，その質に問題の基本があるが，その影響が社会全体にわたり，1つあるはいくつかの時代にわたるには，質とともに，その質を質としてあらせた大きな量というものが必要になってくる。漱石と鷗外とは，彼らの残したような量の大きさを通してはじめて示されるような，そういう特殊な質の文学者・作者だったということが出来る」(『中野重治全集』第5巻，筑摩書房，1961年，p. 22)。

この文章の「偉大な作家，えらい文学者……もともと文学は」というところを「偉大な学者，えらい研究者……もともと学問は」と読みかえることもできるであろう。だがその場合漱石や鷗外にあたるような学者，社会学者，より限定して経済学者——それは必ずしも大学の講壇に立つ学者には限らない——をわれわれは明治以降のわが国に見いだすことができるかが問題となろう。中野は上の文章につづけてこう書いている。「この場合，この量は，これを長さにあらわして6尺とすれば，最初の1尺とつぎの1尺とでは質がちがひ，最後の1尺へと，すべての尺が質の上で発展していることに特徴を持っている。はじめの1尺と第6尺とのあいだに，質の上のちがひがないか，あってもわずかの差にすぎぬという場合には，その後の量の大きな大きさも作家を偉大にしない。この2人は，その点で偉大であった」。鷗外や漱石のように作品群の量的大きさのなかで質的成長をはっきりとしめしているという意味で偉大な思想家の経世家的学者を，近代日本は社会科学別して経済学の領域ではたして生み出すことができたかどうか。こういう問題を設定してみることは，わが国における経済学の，あるいは一般に学問のあり方をふりかえるうえに決して無益のわざではないであろう。

私は本稿でこの問題を正面からとりあげようとするものではない。ここではいわ

* すぎはら しろ 甲南大学教授

ばそのための予備作業の1つとして、明治以降経済学関係のどんな個人全集（乃至は著作集）が刊行されているかをふりかえっておきたいと思う。現在わが国の出版界では個人著作集が流行しており、その数は150種にもものぼるといわれているが、その中には多数の文学者にまじって学者や思想家のものも稀ではなく、経済学者の著作集や、経済に関係ある政治家・実業家・ジャーナリストの作品集も目につくようになった。経済学関係の全集乃至準全集がこんなにさかんになったこと自体さきの問題設定から見ても注目すべきことであるが、この機会に明治末期からはじまったこうした出版物の史的概観を、経済学者の個人全集・著作集を中心として素描し、最後に全集の出版と利用について若干の感想をのべて、本格的な全集書誌の作成や、それをふまえてのさきの問題の究明のための足がかりとしたいと思う。

ところで明治以来現在までにわが国で経済学関係のどのような個人全集または著作集が刊行されており、それがどんな内容をもっているのかということを、どのような方法で検索してゆけばよいであろうか。『参考書誌研究』創刊号（国立国会図書館参考書誌部編、1970年11月）に「全書叢書細目検索ツール」を書いている沢西良子は、検索に役立つ既成の関係文献を紹介しているが、そこに列挙されているもののなかで私が最も活用したのは、『叢書全集書目第参輯、政治・社会・法律・経済類篇其一』（川島五三郎編、東京古書籍商組合、昭和8年）と『全集総合目録』（出版年鑑編集部編、出版＝ニュース社、昭和42年）の2冊である。前者は昭和7年までに刊行された社会科学関係の叢書と全集とを4種に分類したうえで、その1つ1つについてかなり詳細な書誌的データを提供してくれる。戦後から昭和42年初頭までの全集目録である後者は前者にくらべると説明がずっと簡単で、全巻の内容を明記したものとしてないものとがまざっており、明記してある場合も各巻のページ数や定価の記載はなく、刊行年も初回のそれがしるされているだけである。この2冊では昭和8—20年の間が空白となるので、それを補うために川島五三郎・八木敏夫共編の『全集叢書総覧』（四訂版、八木書店、昭和40年）をつかうことにしよう。これは明治初年—昭和39年をカバーするもので、戦後については『全集総合目録』に採録されていないものもひろい上げており、その意味でも補足的な役割をはたすものであるが、極くわずかの特殊刊行物をのぞき各巻の内容その他については全く記載がない。そこで最初にあげた『叢書全集書目』の程度のくわしい説明つきで明治初年から現在までのものをふくむ目録の作成がのぞまれるのだが、沢西は前掲の論文で国会図書館参考書誌部一般参考課が『全集・叢書細目総覧』の刊行をいま準備中であると書いている。全4巻中の第2巻現代編（明治以降の部）が刊行されれば、われわれの渇はいやされることになるであろう。なお後に見るように昭和42年以降個人全集の出版は一段とさかんになって現在にいたっているのだが、最近の刊行状況をうかがうには『図書

新聞』が2回(No. 1118—9, 昭和46年6月26日, 7月3日号)にわたって特集した個人全集・選集・作品集のリストが便宜である。

そこでこうした資料をつかいつつ以下明治以降に刊行された経済学関係の個人全集を見てゆくのだが、そのまえに「全集」の意味と「経済学関係の」という規定とについて一言しておきたい。「全集」の意味を厳密にとれば、個人のすべての著作をあつめたものであってはじめて、「選集」でも「著作集」や「作品集」でもない「全集」の名にあたいすることになるであろう。そして全集に収録されるべき著作の中には、公刊の書物や論文のたぐいだけではなく、講演(義)記録や草稿や日記や手紙などもふくまれるのだから、本当の「全集」を編集刊行することは大変な難事業である。そこで「全集」といっても実質上は主要著作集というべき内容のものがすくなくないのが出版界の実状で、とくにわが国では全集の名を割合ルーズに使用する傾向がある。そこで本稿では全集と銘うたれたもののくせに選集や著作集として出されているものをもふくめて考えることにするが、1巻のみの場合はこれをのぞくことにした。たとえ1巻でも完全に近い全集という場合もありうるわけだが、他方1巻本をも入れて作品集や選集をひろってゆくと、当初の目的とへだたってくるからである。また経済学関係といったのは、狭い意味での経済学(とくに経済理論)に限らず、経済史、金融論、労働問題乃至は経営学といった専門領域を主にするものをもふくめると同時に、それらの一般的分析的研究成果のみならず時論的実践的発言を主にするものでもよいということ、したがって学者・研究者以外の政治家・実業家・思想家の著作をも考察の中に入れるという意味である。ただこのように範囲をひろげると、どこで線をひくかは実際上なかなかむずかしくなり、10数巻の全集で経済学関係の内容の巻が数巻以下である場合、その取捨にまよふのだが、ケースバイケースで処理する他ないであろう。

II

明治も30年代になると、『福沢(諭吉)全集』(時事新報社, 明治31年)や『大西(祝)博士全集』(警醒社, 明治36年)など、学者や思想家の個人全集が刊行されはじめるが、経済学関係のものとしては、明治45年につぎの2種の著作集が出版されているのが目につく。神戸正雄(1877—1957)の『経済論集』(全4巻, 有斐閣)と乗竹孝太郎(1860—1909)の『肅堂遺稿』(全4巻, 経済雑誌社, 明治45—大正元年)とがそれである。神戸の方は「年来起草シタル論文ノ散逸ヲ避ケンガ為メニ、坐右ノ備忘録トシテ蒐集シタ」(第2冊の序)もので、神戸が各種の雑誌に寄稿したものを(1)「純理」(18篇), (2)「政策」(80篇), (3)「財政」(51篇), (4)「雑説」(37篇)に分類してある。乗竹のもの(肅堂はその号である)は彼の死後友人布川静淵が乗竹の主要

著作を(1)経済学、(2)貨幣論、(3)財政論、(4)銀行及貿易に分類編集したもので、採録しえなかったものは残稿一覧と題して各巻の最後にかかげ、その要旨を紹介してある。尺振八に学んで後同門の田口卯吉の主宰する経済雑誌社に入って彼をたすけ、やがて横浜正金銀行にうつって18年勤務、田口歿するやふたび経済雑誌社にもどってそのあとをつぎ、『東京経済雑誌』に自由主義の論陣をはった乗竹の経済思想は、この4巻でほぼこれをうかがうことができる。したがって『肅堂遺稿』は実質的な意味における個人全集で経済学関係のものとしてはわが国で最初の出版物といえるであろう。乗竹は田口の影にかくれて従来あまり顧みられていないけれども、明治の経済学者の中では相当の力量をそなえており(杉原「古典経済学と『東京経済雑誌』」、長・住谷共編『近代日本経済思想史』I、1969年、pp. 224-227 参照)、わが国の経済学個人全集第1号となっても決して不思議ではないと思われる。

大正期に入ると、『内田銀蔵遺稿全集』、『横井博士全集』、『戸田博士著作集』、『大杉栄全集』、『横井時冬全集』、そして福田徳三の『経済学全集』が刊行された。大杉の全集(全9巻、アルス、大正14—15年、これは1963年世界文庫から復刊された)はやや経済学とはなれるが、横井時敬のもの(全10巻、大正13—14年)は農業経済、横井時冬(全3巻、白揚社、大15年)と内田銀蔵のものは経済史、戸田海市のものは経済政策が中心で、いずれも特色のある著作集である。内田銀蔵(1872—1919)は日本経済史の開拓者として有名で、京大文学部の国史学教授として後進の育成にあたり、経済史の学統は本庄栄治郎によって継承発展させられた。この全集(全5巻、同文館、大正11年)は同僚原勝郎が内田の弟子たちである西田直二郎、中村直勝、魚澄惣五郎らを指導してその校訂にあたり、(1)『日本経済史の研究』上巻、(2)同下巻、(3)『国史総論及日本近世史』、(4)『史学理論』、(5)『講論集』という編成で主要著作をおさめている。(1)と(2)との合冊本が大正13年に出、昭和19年には河出書房からはほぼ同様の内容の新版『日本経済史の研究』が出たが、上巻のみで中絶した。このように内田の代表作をおさめた(1)と(2)とが最も重要であるが、(5)に収録された内田の諸論稿は、彼の経済史のみならず経済学一般への関心の強さと、日本のみならず外国の文化にもおよぶ幅広い教養をしめすものとして興味ぶかい。その中におさめられた一文の「鼎軒先生を憶ふ」(『東京経済雑誌』第73巻1834号、大正5年1月)で内田が田口の学問的業績を回顧し、とりわけ『自由交易日本経済論』(明治11年)を「日本経済学の歴史に於て永く名を留むべき著作であると思ふ」(p. 416)と評価しているのは、内田の学風が、東大で教えをうけたリースを通じてドイツ史学を摂取しているのみでなく、一面で田口のようなイギリス系在野史学の影響をもうけている——内田は東京専門学校(早稲田)の出身でもある——ことをしのばせるものとして興味をひく。戸田海市(1871—1924)は京大経済学部の独立(大正9年)とその後の発展とを主

導した長老教授の一人（小島昌太郎「戸田海市先生」、『書齋の窓』有斐閣 No. 16, 昭和30年5月を参照）で、政策関係の講義を担当したが、この著作集（全4巻、弘文堂、大正13—14年）はその講義と諸論文とを同僚の河上肇と河田嗣郎とがつぎのように編集してできたものである。（1）『商業経済論』、（2）『工業経済論』、（3）『社会政策論』、（4）『特殊問題研究』（①取引所問題、②貿易問題、③労働問題）。この中でとくに注目すべきは（1）におさめられた外国貿易論（同書第2編第1章）で、それは戸田の大正9年度の講義を採録したものであるが、「その内容は、古典派貿易理論に立脚しつつも、すでに近代的な要素価格理論を全く独自に包含・展開したもので、当時の国際的水準をこえる独創的な体系を打ちたてていた」（『京都大学70年史』、昭和42年、p. 421）と評価されるものであった。だが大正期の全集として第1にあげられるべき代表的な作品は、何ととっても福田徳三（1874—1930）の『経済学全集』（全6巻9冊、同文館、大正14—昭和2年、別に全21冊のライブラリー版あり）であろう。（1）『経済学講義』、（2）『国民経済講話』、（3）『経済史経済学史研究』、（4）『経済学研究』、（5）『社会政策研究』上下2冊、（6）『経済政策及時事問題』上下2冊という構成で、各巻のはじめに著者の序とおわりに大野隆の作成した索引（人名・書名・件名）がついており、別に総索引一冊が出ている。『全集』刊行の動機は、恩師ブレンタノの生誕80年祝賀の意をこめて、ブレンタノとの共著『労働経済論』の刊行以来現在まで25年間の述作全部を献じようとするものであり、たまたま彼自身50歳を迎えて外遊に出発するに当り、過去の業績を総決算するという意味をこめて刊行する、というにある。最終巻の序にいわく、「本第6巻を以て私が過去25年間筆に訴えて公けにしたものは一の遺漏なく（但し一時的興味のものは捨てて採りませんでした）蒐集し得たわけであります。斯くて第一巻の序文に申述べて置いた通り私は滞りなく過去の総勘定を結了し得る次第であります」。福田はこの『全集』刊行後も逝去までになお数冊の著書と多数の論文を発表しているので、これは彼の50歳までの労作を彼自身の手で集成したものすぎないとはいえ、四半世紀におよぶ多面的な学問的精進のあとをしめすこの『全集』は、福田個人の成長の記録のみならず、わが国の経済学そのものの成長過程の一側面をしめすものとして重要である。ゆきとどいた総索引をもっていることもこの『全集』の特色で、福田自身のドイツ仕込みの素養のほどをしるばせる。

III

昭和に入るとわが国の出版界はいわゆる円本時代をむかえて活況を呈し、経済学の分野でも昭和3年に改造社の『経済学全集』と日本評論社の『現代経済学全集』とがほぼ同時にスタートしてしのぎをけずるのだが、個人全集の出版もなかなか盛んで、昭和10年までにつぎのようなものが続々と刊行された。『鼎軒田口卯吉全集』

(全8巻, 刊行会〔同人社内〕昭和2—4年), 大西猪之助『経済学全集』(全11巻, 宝文館, 昭和2—3年), 『粟津博士論集』(全13巻, 刊行会〔巖松堂内〕, 昭和2—3年), 『堀江帰一全集』(全10巻, 改造社, 昭和3—4年), 『伊藤欽亮論集』(全2巻, ダイヤモンド社, 昭和4—5年), 『左右田喜一郎全集』(全5巻, 第2巻が『貨幣価値論研究』, 岩波書店, 昭和5年), 『渋沢栄一全集』(全6巻, 平凡社, 昭和5年), 『佐野学集』(全6巻, 第2巻「日本歴史研究」・第5巻「ロシア経済史」, 全7巻の予定であったがその中の1巻は未刊, 希望閣, 昭和5年), 『幸徳秋水全集』(全6巻, 解放社, 昭和5年), 『堺利彦全集』(全6巻, 中央公論社, 昭和8年), 『櫛田民蔵全集』(全5巻, 改造社, 昭和10年, 第5巻「軍事税及戦時経済」をのぞいて昭和22年復刻版が出た), 『井上準之助論叢』(全4巻, 附録【伝記】1, 編纂会, 昭和4年)。これらのうち現在あまり知られていないものについてのみ若干の説明を加えておこう。粟津清亮(1870—1959)はわが国の保険学の開拓者で『論集』は彼の著作をその門下生が集大成したもの, 伊藤欽亮(1857—1928)は慶応出身の経済評論家で『論集』には石山賢吉が編集して彼の『日本新聞』や『ダイヤモンド』を舞台に時事問題をとりあげた論稿を収めており, 経済関係のものは多く下巻に見出だされる。つぎに大西猪之助(1888—1922)の全集であるが, 全11巻, 宝文館, 昭和2—3年, 高島佐一郎・南亮三郎編纂で構成はつぎの通りである。(1)経済学認識論, (2)経済原論(上), (3)同(下), (4)経済学研究, (5)経済史(上), (6)同(中), (7)同(下), (8)外国貿易政策, (9)帝国主義論, (10)社会主義論, (11)文明批評。この全集の特色は, 量的に半分以上が遺稿からなっていることで, (2), (3), (5), (6), (7)および(8)は小樽高商における大西の講義ノートである。これらをまとめて活字化するのには特別の作業を要するが, 親友高島と弟子の南が大西の鬼才のよき理解者であった左右田喜一郎の後援と小樽での多くの教え子たちの熱意に助けられつつそれをなしとげた。最初は10巻の予定だったのが, 1巻ふえたのは東京高商専攻部卒業論文(明治44年)の「社会主義論」が福田徳三から高島のところへまわってきたからである。大西の恩師関一から福田がこれをあずかり, 全集刊行に際して彼が高島にこれを送付した事情については第10巻によせた福田の序言にくわしいが, 故人の遺族やこの全集のもう一人の編者南をかこんでの「大西猪之介教授追悼座談会」記事(小樽商大同窓会誌『緑丘』大西教授特輯号, No.64・65, 1969年, pp.66-94)は全集発刊に関する興味ふかいエピソードのかずかずをつたえている。また堀江帰一(1876—1927)の全集は, 全10巻, 改造社, 昭和3—4年で, つぎのような構成である。(1)財政篇(編纂後記, 寺尾琢磨, 以下同じ), (2)貨幣及金融篇上(永田清), (3)同下(永田清), (4)国際経済論(柄沢日出雄), (5)同中(柄沢日出雄), (6)同下(奥田忠雄), (7)社会問題篇(藤林敬三), (8)雑纂上(柄沢日出雄), (9)同下(柄沢日出雄), (10)雑誌論文・日記及書簡(柄沢日出雄)。なお第10巻の末尾に堀江博士略年譜と堀江帰一教授著作目録があるが, 後者は寺尾

琢磨、永田清の作成したもので『三田学会雑誌』（第25巻第2号、昭和2年5月）所収のものの転載である。大学教授でありながら時事新報や東京日日新聞を舞台に時論の健筆をふるい、自由主義から「国家資本主義」（大正10年における同名の講演は第7巻に所収）へと思想的に推移したこの学者を奥田忠雄は第6巻の編集後記で「正に英国の過渡的思想家としてのジョン・スチュアート・ミルに比すべきであろう」としているが、金原賢之助はその財政学がイギリスの「バスターブルに負うところが大きかった」とのべ（金原「堀江帰一先生の憶い出」㊦、『書齋の窓』No. 35、昭和30年2月、p. 6）、飯田鼎は「堀江帰一先生の労働組合論」において彼の「労働組合論は一方ではウェッブ流の労働組合論に立ちつつ、他方ではコールのギルド社会主義の見解にも近寄っている」とかいている（飯田鼎「堀江帰一先生の労働組合論」、『日本における経済学の百年』下、慶応義塾大学経済学会、1959年、p. 378）ように、堀江の思想にはイギリスの影響が最もつよかったようである。この全集には生前の主要著書を中心に編集されており、留学中の日記を収録した点に特色があるが、時論的な雑誌論文で単行本に収録されていなかった多数のものが洩れているので、実質上はやはり著作集とすべきであろう。

昭和11—20年の10年間に経済学関係の個人全集としては『若山儀一全集』（全2巻、東洋経済新報社、昭和15年）と『上田貞次郎全集』とがあるだけである。前者は明治前期に活躍した保護貿易論者若山儀一（1851—1890）の業績を大山敷太郎が集大成したもので、明治経済思想史研究に対する貴重な寄与である。上田貞次郎（1879—1940）の全集は全7巻の予定で、第一回配本として第6巻『人口問題』が小田橋貞樹の校正で出た（日本評論社、昭和18年）が、その後中絶、戦後も今までのところ——『日記』全3巻が刊行された（昭和35年）ものの——続刊されていない。

IV

戦後わが国の出版界は生気をとりもどして戦時中の空白をうずめるのみならず、民主的文化の発展に資すべく活動をはじめが、昭和30年ごろまでは社会的経済的諸条件に制約されて、全集といった大がかりな出版物の実現には種々の無理がともなった。この時期に刊行されたものはつぎのようにいずれも小規模のものであって、次期以降の本格的な全集刊行へのいわば準備段階だったといつてよからう。野呂栄太郎『全集』（全4巻、ただし1巻のみで中止、岩波書店、昭和22年）、同『著作集』（全3巻、三一書房、昭和24年）、河合栄治郎『選集』（全10巻、日本評論社、昭和23—25年）、同『全集』（全21巻、別巻1、社会思想研究会出版部、昭和27年より開始。14冊出版されて中止）、幸徳秋水『選集』（全3巻、世界評論社、昭和23—25年）、片山潜『選集』（全3巻、ただし1冊のみで中止。真理社、昭和24年）、平野義太郎『論文集』（全3巻、日本評論社、昭和24年）、

同『新著作集』(全4巻、別巻1、理論社、昭和29年)、尾崎秀実『選集』(全3巻、ただし1巻のみで中止、世界評論社、昭和24年)、羽仁五郎『選集』(全5巻、岩崎書店、昭和24年)。昭和30年代になると、『服部之総著作集』(全7巻、理論社、昭和30—31年)、小泉信三『選集』(全7巻、KK文芸春秋、昭和32年)、佐野学『著作集』(全5巻、刊行会、昭和32—33年)、片山潜『著作集』(全3巻、河出書房、昭和34—35年)、『小林一三全集』(全7巻、ダイヤモンド社、昭和36年)、『矢内原忠雄全集』(全29巻、第1—5巻が植民政策研究、岩波書店、昭和38—39年)、『武藤山治全集』(全9巻、新樹社、昭和38—39年)、『市川正一著作集』(全2巻、日本共産党中央委員会出版部、昭和38年)、大杉栄『全集』(全14巻、現代思想社、昭和38—43年)、『河上肇著作集』(全12巻、筑摩書房、昭和39—40年)という風に、全集出版にも大型化と安定化の傾向が見られるようになる。だが個人全集が一層盛んになるのは昭和40年代に入ってから、とくにここ数年間の著しい現象で、経済学関係でもつぎのようなものをかぞえることができる。野呂栄太郎『全集』(全2巻、新日本出版社、昭和40—42年)、『山川均全集』(全20巻、勁草書房、昭和41年—刊行中)、『服部英太郎著作集』(全7巻、補巻1、未来社、昭和41年—刊行中)、『野坂参三選集』(全2巻、新日本出版社、昭和42年)、羽仁五郎『歴史論著作集』(全4巻、青木書店、昭和42年)、小泉信三『全集』(全26巻、別巻1、文芸春秋、昭和42—45年)、河合栄治郎『全集』(全23巻、別巻1、社会思想社、昭和42—45年)、『笠信太郎全集』(全8巻、朝日新聞社、昭和43—44年)。幸徳秋水『全集』(全9巻、補巻2、別巻1、明治文献、昭和43年—刊行中)、『大河内一男著作集』(全5巻、青林書院新社、昭和43—44年)、『新渡戸稲造全集』(全16巻、教文館、昭和44—45年)。『大塚久雄著作集』(全10巻、岩波書店、昭和44年—45年)、『石橋湛山全集』(全15巻、東洋経済新報社、昭和45年—刊行中)。『馬場敬治著作選集』(全7巻8冊、酒井書店・育英堂、昭和45年)、『安井琢磨著作集』(全3巻、創文社、昭和45—46年)、『藤田五郎著作集』(全5巻、御茶の水書房、昭和45—46年)、『堺利彦全集』(全6巻、法律文化社、昭和45—46年)。『鈴木茂三郎著作集』(全4巻、労働大学、昭和45—46年)。『福本和夫初期著作集』(全4巻、こぶし書房、昭和46年—刊行中)。

見られるようにこの時期の全集は、幸徳や堺や大杉のケースのように、戦前の全集や敗戦直後の選集を改善してより完全なものにしようとする新しい編者の努力の生んだものである。小泉や河合の全集の場合も同様で、戦後の選集や中絶した全集の実績をふまえつつ、彼等の門下生たちが編集や解説にあたって20巻をこす全集を完成した。20巻をこすものとしてはすでに矢内原のものがあったが、彼の場合はキリスト教関係の内容が大部分であったから、経済学を中心とした個人全集で20巻をこえる本格的な全集(河合の場合は裁判記録や日記を、小泉の場合は翻訳や書簡をふくむ)が、ここにはじめて出現したわけである。これらの全集との対比において私は最後

に河上肇の著作集にふれておきたいと思う。大内兵衛・大塚金之助・小島祐馬・佐々木惣一・末川博・恒藤恭・野坂参三の7名を監修者とし、末川博のもとに白石凡を中心とした編集陣をととのえて(1)初期著作集から(四)日記抄までの全12巻に河上の主要業績をおさめたこの『著作集』は、たしかに河上の全体像を追求するうえに有益な基礎資料を提供したものであるが、河上の長期にわたる多面的な文筆活動を集成したものとしては、量的にも質的にもあきたらぬおもいを禁じえない。天野敬太郎による『河上肇博士文献志』(昭和30年)というすぐれた著作目録が利用可能であっただけになおさらそうである。事実河上の研究者からかなりきびしい注文もつけられているのである(山之内靖「河上肇と唯物史観」上、『思想』1971年7月号, p. 2を参照)。私は河合や小泉が単なる経済学者にとどまらぬ思想家としての活動を通じて大きな足跡をのこした人物であることを認めるし、彼等の業績にふさわしい本格的な全集が完成したことをよろこぶが、河上についてもまた彼等の場合のように、その業績に相応するような全集がこの著作集をふまえて将来考えられてよいのではなかろうか。はじめに引用した中野の表現を以てすれば、河上こそ「最初の1尺とつぎの1尺とは質がちがいが、最後の1尺へとすべての尺が質の上で発展している」といいうる数すくない近代日本の思想家の1人であるだけに、そうした思いをもつのである。『著作集』の編集者の一人白石凡も「天野敬太郎氏と河上肇博士」(天野敬太郎古稀記念論文集『図書館とその周辺』1971年)において、天野が河上肇全集の企画案をつくって編集委員に提案しめしたけれども、出版社側の事情もあってそのプランが完全には実現されえなかった経過をのべ、天野に「深くおわびしなければならぬこと、やがて全集をつくる機を得て是非果したいものと、編集委員一同深く省みております」とかいている(p. 1005)のだから、われわれは本格的な河上肇全集の出現を、今後に期待してもよいであろう。

V

さきにものべたように、わが国では全集という名称が無造作につかわれる傾きがあり、全集といっても、実際は公表された著作を中心とする著作集が主要な作品をあつめた選集にすぎないことが多い。草稿や日記や手紙などの私的生活の記録、それに著者が一家をなすまでの初期の資料をふくんでこそはじめて全集の名に値するであろうが、これらの資料を完全に蒐集することは非常に困難であるうえに、私的な資料の全面的な公開は対人関係ではばられる事情が往々にしてあり、またそうした顧慮をはらう必要がない場合にも、尨大な量にのぼる資料もり込むことを出版の経済的条件という大きな壁がはばむことが十分考えられるので、真に全集の名に値する出版の完遂は大へんな難事業であり、厳密な意味での「全」集というも

のはいわば永遠に達成できぬ努力目標のようなものだといってもよいだろう。したがって私は内容上完璧なものでなければ全集と名づけるべきでないというつもりはないけれども、いやしくも「全集」と銘うつ以上、収録すべくして収録できなかったものは何であるかを読者に明示する義務は最少限度あると思う。もしそれをする用意のない場合は、やはり全集の名はさけるべきであろう。

全集の編成方針について準拠すべきどのような一般的な規準があるのか私は不案内であるが、実際上一番問題となるのは、年代順の配列と内容別の分類とをどのように組み合わせるかという点ではなかろうか。一般に著作集や選集では内容的な視点から巻数とその順序がきめられることが多く、全集になると初期から晩年まで年代順に作品が配列されて巻数を重ねてゆくというケースが常道であろう。ただし後者の場合でも巻そのものの順序は年代順でありながら、各巻の中では、収録作品を内容的にいくつかの項目に分類している場合がすくなくないし、巻の順序自体にも年代順原則に部分的修正が加えられていることがままある。処女作を第一巻においてそれを出発点とするその後の著者の発展過程を巻を追ってたどってゆき、処女作までのいわば習作は最後にまわすという編集も一つの方法であろう。要は読者が最も容易に著者の全体像を把握できるように編成された全集が理想であって、またそこに編者の苦心と腕の見せどころもあるわけである。

校訂の問題も重要である。学術書の場合は文学作品ほど校訂の厳重さを気にかけない傾向があるが、全集の場合は単に従来の刊行物をあつめるだけではなく、未公開のものも採録されるのが普通だから、校訂の作業は極めて重要であり、既刊のものについては著者の生前の最終版を底本とするのがルールであるとしても、初出以来の変化のうちすくなくも目ぼしいものだけでも註記するという配慮がのぞましい。また検閲で抹殺された部分をおこすという仕事もわれわれの場合とくに重要となろうが、その場合は当該箇所をうずめたままでなく、どの部分がけずられたのかを明示する工夫があってしかるべきであろう。

最後に月報のことにふれておきたい。全集の附録に月報がつくというわが国の慣習はおそらく昭和初期の円本時代からはじまったのであろうが、著者に対する人々の追想録や新資料の紹介や編集者乃至出版社からの伝達事項などを主要内容にする月報は、読者が軽い気持ちで読みすてしまうことを見こしたような安易な態度で編集される——月報の編集は全集そのものの編者がこれにあたるのではなく、出版社の編集部が担当する（したがって責任の所在が不明確）場合が多い——傾きがあるようだ。著者に対する回想や研究は全集の別巻としてまとめることもできる——内村鑑三全集の月報が後にまとめられて『回想の内村鑑三』（鈴木俊郎編）となった例もある——のだから、月報のような中途片端なかたちで出すことはどうかと思うし、

出版社に月報を出してゆく余力があるのなら、それを全集そのものの充実に集中してほしいものである。ただ最近の全集の月報にはなかなか読みごたえのあるものがふえてきたので、これをどういう風に整理し保管しておくのが一番よいかということが問題となるであろう。全集刊行の当初に出される内容の紹介用のパンフレット——これは案外資料的価値が高い——のとりあつかい方とともに、わが国の図書館としても考えるべき共通の課題の一つである。

後記 昨年8月に脱稿してから以後に、つぎのようなものがあたらしく刊行を開始した。いずれも現在刊行中である。細川嘉六『著作集』(全3巻, 補巻1, 理論社, 1971年), 本庄栄治郎『著作集』(全10巻, 清文堂出版社, 1971年), 中山伊知郎『全集』(全18巻, 別巻1, 講談社, 1972年), 井上晴丸『著作集』(全6巻別巻1, 雄渾社, 1972年), 横山源之助『著作集』(全4巻, 別巻1, 明治文献, 1972年)。なお帝国農会にあって活躍した小農論者岡田温(1870-1949)の『撰集』(同刊行会編, 全3巻, 1937年)が出ていることを知った。また渋沢栄一の『伝記資料』(同刊行会編, 全58巻, 別巻10巻, 1955-1971年)もあげておくべきであったかもしれない。

経済資料協議会 出版案内

経済学二次文献総目録 有斐閣発売 A5 118頁 950円 1971年3月

経済資料協議会加盟機関および総理府統計局, 国会図書館が明治以降昭和45年3月にわたる経済を主とする二次文献(書誌所蔵目録 総合目録 索引 研究ガイド 抄録年表など)に解説を付して編集・刊行したわが国経済学界唯一の総目録で, 研究者, 図書館のRetrospective searchにもっとも適した目録です。

経済学文献季報 有斐閣発売 B5 約240頁 2,200円 年3回刊
昭和31年創刊

経済・経営に関する内外の図書・雑誌論文を網羅した本邦唯一のカレント・ビブリオグラフィです。学術情報の増大する今日, 世界の経済学界, 産業界の研究動向を最も正確にお知らせするのが, この「経済学文献季報」です。